

現代語における動詞の 移り変わりについて

中川秀太

1. はじめに

「火鉢」「白黒テレビ」など物を表す名詞の場合、古めかしくなった物（それを指すことば）には人がつきやすい。死語、古風な語として記録されることもある。一方、名詞の次に数が多い動詞の場合、それは目で見ることができず、抽象的である。それゆえ、そこに移り変わりがあるのかどうか、名詞に比して言及しにくい。どうすれば動詞の使い方に関して、現代語（範囲は戦後の日本語とする）における移り変わりを捉えられるだろうか。これが本稿の問題意識である。この課題に取り組むには、①分析者自身が気になる動詞の用例を調べる、②国語辞典に古風な語として載る語の用例を調べる、といった方法がある。「津波を警戒する」に対し「津波に警戒する」という自動詞用法がいつ頃から目立つのかについて用例調査をするというような場合が①である。この方法は一般的に行われているものの、対象範囲が狭くなるうらみがある。②は古風と指定される語は調査できるが、その注記がなければ、辞書のみからは移り変わりの有無が判断できない。①②の方法の有効性は認めつつも、本稿では、③同時代人による指摘が記録された文献を渉猟する、④天声人語（朝日新聞）の記事を調べ、そこに出現する動詞の意味・用法を国語辞典などと照合する、という方法をとる。③は2で、④は3以下で検討する。

2. 同時代人による指摘をもとにチェック項目を探る

2.1 語形

以下では主に戦後に書かれた種々の文献から、動詞の使い方に関して何らかの移り変わりに言及している箇所を抽出し、その内容を国語辞典などを頼りに確認したうえで提示する⁽¹⁾。語形には「こまぬく」に対し「こまぬく」（四宮（1977））が、「しなう」に対し「しなる」（中村（1969））が使われるといった現象がある。見坊（1983）は「しなる」は関東甲信越のことばかと推測する。「起こる」「ごてる」「つなぐ」に対する「起きる」「ごねる」「つなげる」など、前者の意味を後者が持ちだす現象に対しては、後者も本来は別の意味を有しているだけに、従来

の使い分けを保持する話者は違和感を持つ。「きかえる」が「きがえる」になるという連濁の問題（幸田（1965））や自動詞「立つ」と他動詞「上げる」からなる「立ち上げる」が使われだすという動詞の組み合わせの問題（呉（1999））⁽²⁾もある。

2.2 意味

既存の語の一部の意味が使われない場合と、既存の語に新しい意味が発生する場合がある。「あがる」の「だめになる」の意（宇野（1988））、「あたる」の「腐る」の意などが前者である（幸田（2012））。あるいは「茶にする」の「ばかにする」が廃れ、「ひと休みする」意は残るという例もある（山本（1980））。一方、「落ち合う」に「約束して（会う）」という意味特徴のない「偶然（会う）」の用法が生じたり（国広（1976））、「かわす」に「抜く」の意味が生じたりするといった現象がある（最上（1987））。百目鬼恭三郎が1977年6月22日の朝日新聞で「私淑する」を「親しく教えを受ける」の意味に使う人が多くなってきている」と指摘したのも、話者の中で語の意味の細部が厳密に捉えられていないことに起因する。

評価の逆転、限定化、比喩により意味に変化が生じることもある。「がんばる」「こだわる」がマイナスからプラスの意味に転じるというのが評価の逆転に当たる⁽³⁾。限定化には、本来プラスマイナスどちらにも偏らないはずの「評価」がプラスの意味で用いられる事例がある（飯豊（1975））⁽⁴⁾。

「比喩」の例には、「陶酔する」意の「しびれる」（大石（1964b））、「人がいなくなる」意の「蒸発する」（黒井（1971））、「熱中する」意の「はまる」などがある（糸井（1997））。よく使われた当時は「流行語」として意識され、しばらく時がたった2020年現在では国語辞典に「俗語」として登録されやすい。もっとも、俗語であっても、その表現が場面・文脈に適すと感じられ、よい評価をえることもある。たとえば歌人の俵万智は1988年1月1日の毎日新聞で「たそがれる」（本来の意味は「薄暗くなる」）について、自身の歌集を読んだ女の子が「何となく秋の夕暮れにちょっと寂しい思いを抱きながらロマンチックしているみたいな……。たそがれにひとりぼっちで、独特の感じにひたっている」意味で「たそがれる」を使ったことを「なかなか言えている」と評した。野球で「球が伸びる」ことを指す「走る」や「闘志が湧く」意の「燃える」（円地ほか（1971））は、小説家の清岡卓行（1922～2006）により「単純な大和ことばに、新しい生命力を注ぎ込んでいるような感じ」と評され、「役職を続ける」意の「続投する」は加藤（2016）で、巧みな比喩であると評価された（初出は1986年9月19日の朝日新聞）。「走る」「燃える」「続投する」の比喩的な意味は国語辞典でも俗語とされていない。このような例は、創造的な言語使用を示すものとして注目される。ただ

し加藤が「一度思いついたら、いつまで経っても同じ比喩を繰り返しているのは、そういう人の文学的無能を示す」と述べる点は言語運用の問題として見逃せない。

2.3 選択制限

述語の主語や目的語に関する意味的な制限つまり選択制限に関し、変動が生じた例としては「ある」が有名であり、鈴木（1998）に詳しい。「おじいさんとおばあさんがいる」が普通の言い方であることは松宮（1943）や三尾（1968）などに指摘があるが、野崎（1979）の頃になると、「いる」が適切だと世の流れを受けて「大昔（から昭和二十年頃まで？）の用法であった」と断らざるをえなくなる。主語の人数に関しては「輩出」（単数の意で使われる現象が生じた）の例があり（山田（2005）※初出は1999年）、「懐妊」の主語が誰かということについては武藤（2009）がある。志賀直哉の『和解』の中で自分・身内のことに「懐妊」が使われることを受けて武藤は「大正時代と現代とでは「懐妊」の語感が違うと見るべきだと思う。今日このことばが使われるのはほとんど皇族の妊娠のときに限られる」とする⁽⁵⁾。選択制限により語の選択が左右される例には「退勤」がある。鈴木（1976）は「以前はつとめに出かけるのを出勤といい、ひけるのを退社と称していたが、最近は例えば退勤時の混雑などと言うようになった。退社では官庁などには具合が悪いという気持も加わっているらしい」とする⁽⁶⁾。

2.4 語感

随筆家の幸田文（1904～1990）にとって「遅れる」意の「おそなわる」には「恐縮の意味の語感」があり（幸田（1965））、日常語であったが、その語を持たない人からは「ゆかしい」と評され（大石初太郎（1911～2003）が1968年8月7日の朝日新聞で指摘。本稿では国語学者、日本語学者、言語学者による指摘の場合は肩書きを省略する）、現在この語を常用する人を見つけるのは難しい。

次に情緒的なことばを使う傾向を見る。たとえば、何かといえは「今の思い」「総理大臣になりたいという思い」など「思い」を連呼するように、これはテレビなどに目立つ傾向である（情緒的に訴えることを受け手が求める、との思い込みがあるのか）⁽⁷⁾。「心温まるひとときでした」という場合の「心温まる」も同様であり（高橋ほか（1988））、ドイツ文学者の高橋義孝（1913～1995）は「イヤですわ」と言い、女優の沢村貞子（1908～1996）は「ゾーッとしちゃうわね」と評した（「心温まる」のかどうかは、個々の受け手が判断することである）。「くれる」に関し「報道関係者、とりわけテレビのリポーターやスポーツ記者たちが」「すばらしいプレーを見せてくれました。といった調子の、とえば多くの人に「ああ例の……」と思い浮かぶであろう」表現が耳障りであるとの指摘もある（渡辺（1985））。客観報道に徹するなら「見せた」で十分ということである。

自分中心という観点から動詞「選ぶ」に着目する。太田（1984）は「結婚相手を選ぶといういい方に、一番抵抗を感じてしまうのである。自分が相手より一段高い所に立って、相手を観察」する雰囲気があるという。現在は「結婚相手の条件」のように名詞の「条件」も似た場面で頻用される。自分が出すぎということでは「こだわる」にも通じる。

以上に加え、連想の問題がある。「出生（しゅっしょう）」は「生」を含む語に「せい」と発音する語が多いことの影響を受けて「しゅっせい」と発音されることがあるが、そのように発音されると第二次世界大戦を経験している世代にとっては「出征」を連想するから嫌な感じがする、というのがこれに該当する（佐佐木ほか（1981）※詩人の吉野弘（1926～2014）による）。

2.5 語種

語感と関係が深いものの、該当語が多いことから、語種に関する事柄は、ここでまとめて扱う。和語より漢語のほうが適切だと感じ、または公的な場には漢語がふさわしいと感じたり⁽⁸⁾、新しい概念であることを意識して和語・漢語よりも外来語を使おうとしたり、といった傾向が目立つ。また、「心温まる」のように情緒的な表現として和語が使われるほか、新語・流行語ないし俗語として、または新しい意味を帯びた動詞として和語が使われるという現象もある。子どもの頃（1911年頃）には「入学する」という語はなく「あがる」と言った、というような指摘は和語→漢語の例である（多賀（1977））。1950年代から1973年までの高度成長の時期や1960年代から1970年代にかけての学生運動の時期に漢語を多く使う層が増えるとの観察もあり（外山（1976）、芳賀（1979））、それが現在まで尾を引く。外山の「かりに男が観劇と言っても女は“お芝居を見に行く”という言い方をしたように思う」という指摘はことばの男女差に関する課題でもある。

外来語には「ゲットする」「クリックする」のように定着する動詞もあるが、廃れるものもある。「大学へ通っていましたがとは名ばかりで、いつもエスケープ（おおこの古くさき英語よ）して東京の街中を歩いた」とある「エスケープする」のようにである（サトウ（2005）※作詞家のサトウハチロー（1903～1973）による）。

「激写する」のように表現を強める目的で漢語を使うことがある（鈴木（1984））。斎賀（1983）は「熱唱」について「二十年ほど前、ある新聞社の文章研究会の席上で、「デビュー曲を熱唱」という見出しを問題にして、こんな新造語は好ましくない」と批判した記憶がある」という。

新語・流行語や俗語など若い人（を対象にした雑誌や番組）が使う動詞には和語が多い。主に人に対する評価を意味する動詞が目立ち、高い評価を表す「いかす」（奥野（1960））、「いえる」「いえてる」（川崎（1981））、「うける」（斎藤（1984））、「いけてる」（ほんざわ（1997））などがあり⁽⁹⁾、反対にだめだと判断されれば「使

えない」と評される(川崎(1981))。「虚勢を張る」意の「つっぱる」(小沢(1976)、小堀(1982))や「興ざめる」意の「しらける」も低い評価を表す。小説家の山口瞳(1926～1995)は1974年12月26日号の『週刊新潮』で「シラケルという言葉は二年ぐらい前から流行しだしたように記憶する。それも、中学生とか高校生とかという若い人たちの間で流行り出した」と述べた(山口(2017))。「怒り」関連の表現としては、従来の「腹を立てる」に対し、「頭に来る」(三国(1958))⁽¹⁰⁾、「とさかに来る」(石綿(1963))が生じ、さらに「むかつく」(小林・氷室(1987))、「ぷつつんする」(1980年代)、「きれる」(出川(1998))などが生じた。

2.6 品詞性

以下では、活用、自他、格助詞、サ変動詞、コロケーション、名詞を好む傾向について考える。活用は、いわゆる「ら抜きことば」の論じられることが多いが⁽¹¹⁾、ほかにも、たとえば「しず→せず」という移り変わりがある。外山(1918)は「自分達はいつも「支度もしずに出かけた」といふ」と述べ、戦後にも高橋(1985)の「何もせず(東京風に云えば「何もしず」になるところか)」という指摘があるが、特に下町に顕著なこの否定形を現在耳にすることはほとんどない。またかつては「はじめての試験が控えてい、各級とも時間割が発表された」(幸田文の『草の花』)のように「てい」が使われたところには現在「ており」が多用される。

動詞「する」には千葉県、埼玉県、神奈川県に「そうすればいい」「そうするよ」などの形が用いられ「やがて東京に広まるであろう」とされたが(大野(1965))、この予測は今のところ実現していない。「来る」の否定形「きない」を近頃「よく東京では聞く」という指摘もあったが(野元(1956))、これも一般化はしていない。福島県や栃木県で盛んで「東京都区内にはわずかに入りこんでいるのみである」とされた「違う」の活用形「ちがかった」は(井上(1983))、現在かなり「入りこんでいる」。

「測定を間違う」に対し「間違う」は自動詞、「間違える」は他動詞ですから、ここは当然「間違える」としななければならない(辻村(1962))という指摘に、他動詞「間違う」の台頭がうかがえる。また、「野菜をいためる」に対する自動詞の「いたまる」が料理特有の言い方として問題となる(手塚(1981))⁽¹²⁾。

格助詞の使い方は「神社に参拝する」に対する「神社を参拝する」が話題になった(土屋(1981))。前述の「警戒」など「に・を」のゆれは広範囲にわたる⁽¹³⁾。サ変動詞には名詞からサ変動詞用法が生じる場合と、既存のサ変動詞用法が衰退する場合とがある。前者の例に「青春する」(土屋(1992))や「(レンジで)チンする」がある。荻野(1996)は「20年以上前」に初めて「チンする」を耳にしたという(なおエッセイストの石井好子(1922～2010)が『ミセス』の1975年8

月号に載せた文章には「クックする」が「チンする」と同様の意味で用いられる。「サラリーマンする」「女子大生する」「とらばーゆする」「お茶する」など数多くの例が「最近はやり」の言い方として森田（1988）に挙がる。

サ変動詞用法の衰退は「雑踏」や「徹宵」などに起こっている。

（1）見物人で、見物人だけで、雑踏していた。（小林秀雄『考えるヒント』）

（2）各自が自作を朗読し、それを一同で検討した。夕方に始まり、徹宵するきびしきだった。（大村彦次郎『時代小説盛衰史』）

（1）（2）の状況には「混雑する」「徹夜する」が使われやすい。「原因」では動詞として表現する必要性そのものが衰え、「原因がある」の形が使われる。「鎮静する」には「鎮静化する」という接辞をつけた言い方が生じた（芳賀（1980））。「結論する」「定義する」を「結論づける」「定義づける」とする例もある。

「電話をかける」か「電話する」かというコロケーションの問題について（「電話する」はサ変動詞の問題でもある）、1968年のNHKの『文研月報』208は「電話をかける」が普通だとする⁽¹⁴⁾。自身の所属する会社などに電話をかけるときに使う「電話を入れる」もあり、久保田（1977）は1955年頃に気がついた。「一服」に関し中国文学者の奥野信太郎（1899～1968）は「昔の人はよく“一服やる”ということをついたものだ。しかし今の若い人はほとんどこんなことはいわない。若い人ばかりではない。ぼくたちだって使わないことば」であるが親の世代では毎日のように口にしたと記す（奥野（2010））。寿岳章子（1924～2005）は「一服」をよく使うのは「高齢層で、若い人はそれこそ「お茶する」とまでゆかなくとも、「ちょっと休む」「タイム」「小休止」「休憩」などを使う」とした（寿岳（1986））。

名詞を好む傾向は外山（1981）などで指摘された。「集まれ」ではなく「集合」が、「芝居を見る」ではなく「観劇」といった名詞を使う言い方が目立ったという。この傾向は安部（2009）が「名詞優位化現象」という名で詳述する。

2.7 待遇表現

敬語には豊富な先行研究があり、戦後の変遷について知ることも容易である。以下では、えん曲表現、あいさつ、接続詞に関連する項目に絞って検討する。

人が死んだときに言う「母を殺しまして」は古風な表現になり（川本（1976））、別に「なくす」という言い方もできるが、現在では「昔は亡くなるというのは、人の父親とか、とにかく人が亡くなる時に使った言葉だ。この頃は身内に使っている」（岩淵、水谷（1969）※岩淵による）と評される「なくなる」が一般化した⁽¹⁵⁾。「考えておく」は、上の世代はえん曲な断りの意味で用いるが、それを聞いた下の世代は文字どおりの意味に解釈するという（中村（1954））。

随筆家の夏目伸六（1908～1976）にとって「行ってまいります」は日常のあいさつことばであったが、林（1979）では「昨今「行って来ます」に変わりつつあ

る」と記録される⁽¹⁶⁾。動詞連用形に「ます」をつけて接続詞的に使う現象があり、「議会の政府側答弁などでは「続きまして」とか「従いまして」とかがふつうの言い方らしい」が「過剰敬語と見られる、「続いて」「従って」で十分である、丁寧なものを使いをするばあいでもこれで十分である」と評された(大石(1964a))⁽¹⁷⁾。

2.8 言語主体

以下では、その動詞を使うのは誰なのかを考える。大人は大人の使うことばを観察しやすいが、親や教師といった立場にでもない限り、子どものことばを観察する機会は乏しい。それゆえ、たとえば「むかつく」について「中学生の女の子たちが「むかつく」って言うんですね(小林、氷室(1987))」というような指摘は、子どもがどういう動詞を使うのかの報告として貴重である⁽¹⁸⁾。子どもの周りにいる大人の使うことば(子どもも使うようになる)としては「入園」「卒園」があり、幼稚園に行く子どもが多くなったので定着してきたが、「まだいくらか奇異な感じがする。幼稚園では授業をしないから「卒業」でないのはわかるが」との指摘がある(稲垣(1983))⁽¹⁹⁾。子ども向けの番組である「仮面ライダー」(1971)に出てきた「変身」は流行語となり、その後、ファッション業界では「華麗なる変身」とか「あなたも変身できる」とか使われているようです。そして、この意味では今も使われています」ということになる(寿岳(1978))。

「拝観する」とは、見せてもらうほうから言うことで、「拝観」を受ける側が自分で「拝観料」と名づけるのはおかしい(芳賀(1976))という指摘では、誰がその動詞を使うべきなのか、という主体の立場が問われている⁽²⁰⁾。

2.9 言語主体の態度

しばしば指摘されるのは現代人の断定を嫌う傾向であり、それゆえ「とか」や「かな」が頻用される。動詞に関しては「である」を「であるといえよう」としたり(小汀ほか(1964))、「近ごろ結婚式などでよく耳にすることば尻がある。「……したいと思います」とか「……と思います」(多田(1994) ※初出は1977年10月号・11月号の『潮』)としたりする現象がある。多田は「いちいち「思わ」なくても、さっさと次に移ればよい」と評し、昔はあまり耳にしなかったという。

2.10 地域方言と社会方言

標準語ないし東京語の動詞として使われてきたものが衰退する、または全国各地の方言が一般化する場合がある。「質物の所有権がなくなる」意の「流れる」は前者の例であり、1957年の『週刊朝日』62-5で映画説明者の徳川夢声(1894～1971)が対談相手の幸田文に「寄席なんかで、「何カ月で流れちゃう」なんていうと、お客はどっと笑ったものですが、このごろ、通じなくなりました

ね。この「流れる」は、通じなくなりました(笑)」と述べている(幸田(2012))。「からかう」意の「おちよくる」は広く使われるようになった関西の動詞である(寿岳(1965)では関西らしい方言として紹介されていた)。

「興行に失敗する」意の「こける」は、小説家の小林信彦(1932～)によれば「〈コケる→笑い〉という発想が一九六〇年代の東京にはなかった。だから、〈コケる〉がテレビを通じて一般的になったのは、ずっとあとである」とのことである(小林(2010))⁽²¹⁾。

競馬の世界の「ばてる」(疲れる)が一般化したり(芳賀(1960))、ボートレース(または水泳)の世界の「水をあける」(差をつける)がそれ以外の世界でも使われるというような社会方言の例もあり(高橋(1965))、これらには地域性が指摘しにくい。

学生運動に参加する学生・青年が用いた「ひよる」「総括する」「連帯する」なども一種の社会方言と見なす(一般社会よりも使用頻度が高いということも方言の条件とする)。赤塚(1968)に「社学同ML派やマル学同中核派の機関誌を見ると「連帯する」とか「勝利する」とかいった使い方が目立っている」とある⁽²²⁾。

2.11 行為に対する見方

たとえば宇佐美、米川(1997)で米川は「私たちの感覚では「楽しむ」というのはいいことなんですけど、上の世代は違うでしょう。楽しむことは「悪」です。遊ぶは「悪」、仕事は「善」なんです」と指摘し、宇佐美は「戦後のつらい時期に汗水垂らして働いて、高度経済成長を支えてきた、遊ぶということを知らない人たちですから、そういう価値観にならざるを得なかった」と応じている⁽²³⁾。このような場合、「楽しむ」という動詞の意味や使い方というよりも、「楽しむ」という行為そのものが問題になっている。時代状況を背景にして、ある行為に対する見方が世代によって異なるということである(広い意味では「語感」に含められる可能性もあるが、念のため別に考える)。川上(1993)が「なおすより捨てて買替えた方が安上がり——などという罰当たりな言いぐさが横行するようになったのは、ついこの二、三十年来のことに過ぎない」と指摘する「捨てる」では、この動詞がよく使われることと同時に、捨てる行為に対する人々の感覚が問題になっている。もっとも、「サステイナビリティ(持続可能性)」ということばが定着しつつある現在では、多少とも状況は変わってきている(と見たい)。

3. 『天声人語』を用いた調査

3.1 調査概要

前述のチェック項目を頼りにしながら、『天声人語』(文庫版)を使って、戦後に何らかの変動のあったとおぼしい動詞を見つけ出す、というのが以下の課題

表1 『天声人語』の著者名、生（没）年、出身地、巻、執筆時期

執筆者（生（没）年）	出身地	巻	執筆時期
嘉治隆一（1896～1978）	兵庫	1	1945・9～1949・12
荒垣秀雄（1903～1989）	岐阜	1	1945・9～1949・12
荒垣秀雄（1903～1989）	岐阜	2	1950・1～1954・6
荒垣秀雄（1903～1989）	岐阜	3	1954・7～1958・6
荒垣秀雄（1903～1989）	岐阜	4	1958・7～1963・4
入江徳郎（1913～1989）	福岡	5	1963・5～1966・12
入江徳郎（1913～1989）	福岡	6	1967・1～1970・4
正田桂一郎（1924～2002）	東京	7	1970・5～1973・3
深代惇郎（1929～1975）	東京	8	1973・4～1975・11
辰濃和男（1930～2017）	東京	9	1975・12～1980・12
辰濃和男（1930～2017）	東京	10	1981・1～1984・12
辰濃和男（1930～2017）	東京	11	1985・1～1988・8
白井健策（1933～1999）	東京	12	1988・8～1991・12
白井健策（1933～1999）	東京	13	1992・1～1995・8
栗田亘（1940～）	東京	14	1995・8～2001・3

である。朝日文庫として14冊（署名入り）が刊行されている。これらをすべて読み、筆者が気になった動詞を抜き出すという作業を行った。これにより、広範囲の動詞について観察することができた。難点は、筆者が気づかない移り変わりがありうることである。筆者よりも知識や経験の豊富な人物が同様の調査をすれば、より多くの発見があるという可能性には目をつぶり、まずは調査を進めることにした。表1に各巻の著者名などを記す。文庫には番号が記されるのみであるが、ここでは便宜上「巻」を用い、「1巻」「2巻」と呼ぶ。

3.2 考察

語形の問題例に「ときほぐす」（3巻）があり、『日本国語大辞典 第2版』（『日国』）は永井荷風（1879～1959）や有島武郎（1878～1928）の小説の用例を示す。現在は「ときほぐす」が一般的である。コロケーションについて、白井は「つえをひく」（13巻）を取り上げ「昔は散歩や旅行に出ることを「杖を曳（ひ）く」と言ったものだ。ステッキを日常使う人も多かった。近ごろ、あまり見かけない」

と述べる。現在も「つえ」を使う人はいるが、表現は「つえをつく」が出やすい。「たばこをのむ」(12巻)は呉(1999)に1970年頃までは普通の言い方であったとある。「曲げる」について、6巻に「つい十年くらい前までは、東京の電柱の広告の六割くらいは質屋の名前だった。(中略)昔のように飲んだくれの亭主が「こいつを曲げてこい」などと女房に質屋通いをさせるわけにゆかぬ」との指摘がある。「質に入れる」意の「曲げる」は落語の頻出語であるが、5代目の古今亭志ん朝(1938～2001)は客に通じにくくなった語の一つに挙げた(読売新聞社会部(1988))。「入りこむ」意の「のめずりこむ」(9巻)は『日国』のほか『広辞苑 第7版』『大辞林 第4版』に載る動詞であるが、サ変動詞について後述する際に言及する小型の辞書では立項するものがない。4巻に2例見られる「老い込む」は、類義語の「老け込む」に対して影が薄くなってきたようである。

表2 (新聞)記事における「老い込む」と「老け込む」⁽²⁴⁾

	朝日	読売
老い込む(老いこむ)	30	22
老け込む(老けこむ)	411	430

1巻や2巻には特にサ変動詞用法について気になるものが多い。各語についての国語辞典の掲載状況を記した表を示す。『日国』がサ変動詞用法を明記するか、明治以降の用例として「～する」のついた例を示すかする場合に○をつけ(翻訳作品を含む)、それがない場合は△をつける。『岩波国語辞典 第8版』(『岩国』)、『学研現代新国語辞典 改訂第6版』(『学研』)、『現代国語例解辞典 第5版』(『現国例』)、『三省堂国語辞典 第7版』(『三国』)、『新選国語辞典 第9版』(『新選』)、『新明解国語辞典 第7版』(『新明解』)、『明鏡国語辞典 第2版』(『明鏡』)については、「サ変」「一する」と表示される場合に○、用例もある場合は◎をつける。サ変用法の記載がない場合は△、見出しがない場合は×を記す。

表3 サ変動詞用法の有無

	巻	日国	岩国	学研	現国例	三国	新選	新明解	明鏡	朝日	読売
阿付	1	△	○	×	×	×	○	×	×	1	0
指称	1	○	△	×	×	×	×	×	×	0	1
拍車	1	△	△	△	△	△	△	△	△	0	1
縮図	1	○	△	△	△	△	△	△	△	1	1

満腹	1、5	△	○	○	◎	○	○	○	○	89	82
固成	1	○	×	×	×	×	×	×	×	0	0
想察	2	○	×	×	×	×	×	×	×	0	0
登高	2	○	△	×	×	○	△	○	×	3	2
身揺るぎ	2	○	×	×	×	○	×	×	×	0	0
独創	2	△	○	○	△	○	△	○	△	9	11
鼓腹	2	○	○	○	×	×	×	×	×	0	1
とまどい	3	○	×	×	△	△	△	△	△	1	3
雑踏	7	○	○	○	○	○	○	◎	○	12	21

「縮図する」「固成する」など『日国』のみにサ変用法が記載され、新聞にも用例がほとんどないような語については、サ変動詞用法が衰退したものと見てよいと考える。「身揺るぎする」の類義語「身動きする」では、朝日に168例、読売に124例がある。「独創」は「独創的」などと使われ、「創造する」であれば、朝日に5,618例、読売に5,381例見られる。「創造する」でも、模倣でないことは伝わる、書きことばであれば漢字によって「想像する」との区別はつくといったことが背景にある。「雑踏する」に対し「混雑する」には朝日で10,653例、読売で9,972例が見られる。「雑踏」は和語の「人混み」に対応する漢語の名詞というように、その用途が限定されつつある。「満腹」は朝日に合計で1,951例、読売に1,667例があるように、語としては現在でも使われているが（「指称」「想察」は語そのものの用例を見つけるのが困難）、「満腹する」の場合は、たまに使われる程度の状況にあるのが気になる。話しことばの場合も含め、筆者は以下のように推論する。会話では「腹／おなか（が）いっぱい」または「満腹、満腹」などが現在の状態をえがくのに用いられ、未来や仮定の場合は「満足するまで食べる」などの表現をする⁽²⁵⁾。それゆえ「満腹する」「満腹した」の形が必要ない（困難ではあるが、過去の時代の状況を確認する手がかりを得たい）。一方、書きことばでは、口語的な「腹」や「おなか」を用いずに、文章にふさわしい語で「腹がいっぱいになること」を端的に表現したい場合がある。「満腹する」は、そのような目的にかなう、いわばとっておきのサ変用法であり、会話・文章ともに普通に現れる言い方とは言いがたい状況にある。最後に「樹冠が大きいと風に倒れ易いので、台風シーズンの前に枝葉をすかすのは分かる」（3巻）というときの「すかす」について考える。「すきまを作る」「まばらにする」意である（『岩国』）。新聞記事にはごくわずかな例しかない。東京の本郷に生まれ育った山下好子氏（1939～）のお宅では定期的に植木屋さんに庭木の手入れをしてもらっているそうであるが、

山下氏の使うことばは「間引く」である。都内の大学生・社会人（専業主婦、仕事から退いた人もこれを含む）、106人ほどに尋ねてみても、「間引く」の回答はあっても「すかす」は出てこない⁽²⁶⁾。しかし、この言い方は園芸の世界には生きている。大宮盆栽協同組合の理事長・浜野博美氏、藤樹園の若手の職人さん、盆栽教室の皆さん、大宮盆栽美術館の盆栽技師・斉藤真之氏から2020年8月に伺ったこと、および11月以降に庭師の伊藤隆行氏やほかの庭師の方から伺ったことをまとめると、次のようになる。盆栽では「葉をすかす」という言い方をするほか、「抜く」「間引く」「葉すかしする」という言い方もする。「すかす」のは風通しや日当たりをよくするためである。葉がこむ（密集する）のを解消するための作業であり、「枝をすかす」「枝すかし」とは言わない（斉藤氏）。「完成品をイメージして行う」との声もある（伊藤氏）。各活用形は伊藤氏によると「すかさないでトビ（飛び出ている枝）だけとつといて」「すいといて」「枝をすかしているの」「すかす {枝/木}」「枝をすかした木」「すかせばすっきりする」「（新人などが指示どおりにすかしていないときなど）すかせ」といったふうに用いられる（「枝をすかす」の使用には個人差がある）。「抜く」が「強剪定」とも呼ばれ、木の全体に影響が及ぶ程度の取り除き方について用いられるのに対し、「すかす」は「弱剪定」とも呼ばれ、細かい枝や葉の除去について用いられるという使い分けがある。一方「すかす」と「間引く」については、一方を使う人は他方を使わないという傾向があり、同一人物における使い分けがある組み合わせのほうが、より類義語的な性質が強いとするならば、「すかす・間引く」の類義語性はやや低い。「すかす・間引く」を使い分ける、あるいは「すく」を使うという専門家がいるのかどうかという点など、さらに追究すべきことが残るものの、当初の筆者の疑問は解決した。つまり専門家の間では今も普通の言い方であるが、一般の人の生活には現れにくくなっているというように整理できる⁽²⁷⁾。

4. おわりに

戦後の日本語の動詞に関して、少なからぬ移り変わりがあったことを証明することが本稿の目的であった。同時代人の証言と筆者自身の用例調査により、ある程度、その目的を果たすことができたことと考える。しかし、用例調査は、これで十分であるとは言いがたく、ほかの方法ないし資料を模索する必要がある。また、ほかの品詞における移り変わりについても調べなければならない。

参考文献

- 青木玉（2007）『底のない袋』講談社
赤塚行雄（1968）「ハレハレ・ゲバ・ノンポリ」『週刊読売』27-40
安部清哉（2009）「意味から見た語彙史」『シリーズ日本語史2 語彙史』岩波書店

- 飯豊毅一 (1975) 「動く日本語」『日本語教育』28
- 石綿敏雄 (1963) 「現代語の語彙」『講座現代語 1 現代語の概説』明治書院
- 市河三喜 (1933) 「現代語について」『ことばの講座 1』日本放送出版協会
- 糸井通浩 (1997) 「流行語の修辭・造語法」『国文学解釈と教材の研究』42-14
- 稲垣吉彦 (1983) 『ことばの輪』文芸春秋
- 井上史雄 (1983) 「誤用の社会言語学」『月刊言語』12-3
- 岩淵悦太郎・水谷静夫 (1969) 「移り変わる日本語」『経済往来』21-3
- 宇佐美まゆみ、米川明彦 (1997) 「日本語の問題 日本語教育との接点21 「若者の言葉」
 (2) 現代若者語の特徴」『月刊日本語』10-4
- 内村直也 (1986) 「頑張る」『国語の教師』15
- 宇野信夫 (1988) 『まちがいの言葉 おかしい言葉』河出書房新社
- 円地文子、大江健三郎、清岡卓行 (1971) 「日本語の伝統と創造」『群像』26-8
- 大石初太郎 (1964a) 「敬語について」『国語教室』118
- 大石初太郎 (1964b) 「語句の意味」『国語教室』119
- 大石初太郎、渋谷秀雄、高橋義孝、俵萌子 (1970) 「不作法の限界」『言語生活』227
- 太田治子 (1984) 『母の万年筆』朝日新聞社
- 大野晋 (1965) 「変化しやすい語と変化しにくい語」『口語文法講座 2』明治書院
- 荻野綱男 (1996) 「文化の多様化と語彙の多様化」『国文学解釈と教材の研究』41-11
- 奥野信太郎 (1960) 「おしゃれことば今昔」『AAA』4
- 奥野信太郎 (2010) 『日本人の知性15奥野信太郎』学術出版会
- 小沢昭一 (1976) 『言わぬが花』文芸春秋
- 小汀利得、渡辺一夫、池田潔、江湖山恒明、高橋義孝、片桐顕智、熊谷幸博、井口虎一郎 (1964) 「日本語の現状と将来 (3)」『文研月報』14-6
- 加藤周一 (2016) 『夕陽妄語 1』筑摩書房
- 川上泰 (1993) 「かしこませる尊敬語」『国学院雑誌』94-4
- 川崎洋 (1981) 『流行語』毎日新聞社
- 川本茂雄 (1976) 「「死なせる」と「殺す」」『言語生活』294
- 木田章義 (2013) 「お喜び様？」『図書』775
- 国広哲弥 (1976) 「国語の乱れと学習不十分」『言語生活』297
- 久保田正文 (1977) 「かける、いれる」『文芸春秋』55-1
- 呉智英 (1999) 『ロゴスの名はロゴス』メディアファクトリー
- 黒井千次 (1971) 『仮構と日常』河出書房新社
- 見坊豪紀 (1983) 『ことば さまざまな出会い』三省堂
- 幸田文 (1965) 「もちこみ」『暮らしの手帖』82
- 幸田文 (2004) 『父その死』新潮社
- 幸田文 (2012) 『増補幸田文対話 (下)』岩波書店

- 小林信彦 (2010) 「気になることば2」『週刊文春』52-36
- 小林信彦、氷室冴子 (1987) 「小説ことばは耳感覚で」『季刊東京人』5
- 小堀杏奴 (1982) 『不遇の人鷗外』求龍堂
- 斎賀秀夫 (1983) 「野球記事の見出しと新造語」『言語生活』382
- 斎藤次郎 (1984) 「子どものことばと意識」『言語生活』389
- 佐佐木幸綱・鶴保正明・林四郎・吉野弘 (1981) 「ことばの値打ち、ことばのはやり」『言語生活』356
- サトウハチロー (2005) 『サトウハチロー僕の東京地図』ネット武蔵野
- 四宮恭二 (1977) 『文痴追放』日本放送出版協会
- 清水俊二 (1988) 『映画字幕の作り方教えます』文芸春秋
- 寿岳章子 (1978) 『日本語の裏方』講談社
- 寿岳章子 (1986) 「私の助数詞意識」『日本語学』5-8
- 寿岳しづ (1965) 「おちよくる」『言語生活』165
- 鈴木信太郎 (1991) 『記憶の蟹気楼』講談社
- 鈴木孝夫 (1976) 「語彙の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店
- 鈴木英夫 (1984) 「明治期の日本語」『ユリイカ』16-12
- 鈴木英夫 (1998) 「規範意識と使用の実態 「(人が) ある」と「(人が) いる」を中心として」『日本語学』17-6
- 多賀義勝 (1977) 『大正の銀座赤坂』青蛙房
- 高田宏 (1998) 『ことばの処方箋』角川書店
- 高橋義孝 (1965) 『おやじといたしましては』オリオン社
- 高橋義孝 (1985) 『華の園』朝日新聞社
- 高橋義孝 (2001) 『私の人生頑固作法』講談社
- 高橋義孝・柳家小さん・沢村貞子 (1988) 「ほどのいいはなし 東京言葉今昔」『東京人』3-5
- 多田道太郎 (1994) 『多田道太郎著作集6 ことばの作法』筑摩書房
- 辻村敏樹 (1962) 「日本語えんま帳1」『速記学習』1-4
- 辻村敏樹 (1963) 「敬語表現」『国文学解釈と教材の研究』8-2
- 土屋信一 (1981) 「「永平寺を参拝」「彷彿とさせる」「御飯をよそる」は正しいか」『言語生活』354
- 土屋道雄 (1992) 『日本語よどこへ行く』日本教文社
- 出川直樹 (1998) 『現代ニホン語探検増補版』小学館
- 手塚富雄 (1981) 『手塚富雄著作集7』中央公論社
- 戸板康二 (1958) 『街の背番号』青蛙房
- 外山滋比古 (1976) 『日常の言葉』みずうみ書房
- 外山滋比古 (1981) 『日本語の素顔』中央公論社

- 外山たか子 (1918) 「東京者の東京言葉」『国語教育』3-11
- 中村広徳 (1969) 「動詞を中心とする表現上の問題」『国文学解釈と教材の研究』14-7
- 中村通夫 (1954) 「ことばの魔術」『文芸春秋』30-16
- 夏目伸六 (1964) 『父・夏目漱石』文芸春秋社
- 野崎昭弘 (1979) 「困った教え方」『月刊言語』8-6
- 野元菊雄 (1956) 「若い人たちのことば」『知性』7
- 芳賀綏 (1960) 「生活の中にはいったスポーツ用語」『言語生活』109
- 芳賀綏 (1976) 『失語の時代』教育出版
- 芳賀綏 (1979) 「和語ばなれ」『月刊言語』8-9
- 芳賀綏 (1980) 「ダイタイとダイガエ」『月刊言語』9-4
- 芳賀綏 (1984) 「ことばのひびき、語感の調和はくずれるか」『国文学解釈と教材の研究』29-6
- 林巨樹 (1979) 『日本の言の葉』東京書籍
- はんざわかいいち (1997) 「いまどきの流行語、知ったかぶり、分野別総覧」『国文学解釈と教材の研究』42-14
- 松宮一也 (1943) 「「みます」と「あります」(続)」『コトバ』5-8
- 松本修 (1999) 「キレル・ムカつく考」『日本語学』18-13
- 三尾砂 (1968) 「現代語の「ある」考」『日本語』8-2
- 三国一朗 (1958) 「弱い」『言語生活』77
- 水谷静夫 (2011) 『曲り角の日本語』岩波書店
- 水谷静夫、竹西寛子、小林恭二 (2000) 「日本語と辞書」『図書』619
- 武藤康史 (2009) 「「御吉兆」から「御懐妊」へ」『myb』26
- 最上勝也 (1987) 「「かわす」と「バラける」」『新放送文化』5
- 森田良行 (1988) 「「する」の怖さ」『群像』43-8
- 山田俊雄 (2005) 『詞苑問歩 続』三省堂
- 山口瞳 (2016) 『山口瞳電子全集1』新潮社
- 山口瞳 (2017) 『山口瞳電子全集3』新潮社
- 山本夏彦 (1980) 『つかぬことを言う』平凡社
- 読売新聞社会部 (1988) 『東京ことば』読売新聞社
- 渡辺実 (1985) 「語る自分を語る言語形成」『月刊言語』14-12

注

- (1) 移り変わりの研究が進んでいるアクセントは本稿では取り上げない。また、言語政策にかかわるところの大きい表記についても、ここでは原則として言及しない。
- (2) 呉はコンピューター業界の用語として1970年代前半に耳にしたことがあるという。
- (3) 「がんばる」は市河 (1933)、内村 (1986) を参照。「こだわる」の流行については

- 百目鬼恭三郎（1926～1991）による1977年8月8日の朝日新聞の指摘が早い。
- (4) 水谷ほか（2000）で小説家の小林恭二（1957～）が「評価」は「いいものだとばかり」だと思っていたと発言したのに対し、水谷静夫（1926～2014）は「まだ違和感がある」とし、小説家の竹西寛子（1929～）もそれに同意している。
 - (5) 『岩波国語辞典』は第5版（1994）の「自分・身内には「身ごもる」と言っても「懐妊」とは言わない」を第7版（2009）で「最近では自分・身内には「身ごもる」と言っても「懐妊」とはあまり言わなくなった」に変更した。「最近」の時期の調べが要る。
 - (6) 「出社・退社」「出勤・退勤」の現状が調査課題となる。
 - (7) 「思い」については高田（1998）を参照。
 - (8) 現代人の漢語を好む傾向については芳賀（1984）が詳しい。
 - (9) 1978年の流行語「とんでる（女）」は「翔んでる」と書かれたので「いまはルビをふらぬと読めないひとがいるかもしれない」という指摘につながる（清水（1988））。
 - (10) 三国は「民間テレビが発足した」1953年頃に「頭へ来た」をよく耳にした。なお「むかつく」「きれる」は大阪の芸人がテレビで広めたという（松本（1999））。
 - (11) 高橋（2001）に五段動詞に「（行か）れる」の形が行われたことの証言がある（「行かれる」は現在も高齢層などに残る）。高橋は「下町っ子」の叔母が「こんなまぜいタバコは吸われたもんじゃありゃしないよ」という言い方をしたと述べる。戦前の文献には頻繁に出る形であるが、個人的経験を記した資料は珍しいように思う。
 - (12) 初出は1971年。「炒まる」は木田（2013）では「まだ違和感があり」と評される。
 - (13) 他動詞化が顕著なのか自動詞化が顕著なのか、その理由はなぜなのかが課題となる。なお「警戒」については高橋是清（1854～1936）の自伝（中公文庫版の『高橋是清自伝（上）』）に「私に警戒して玄関にも寄せつけない」という用例があった。これが当時の一般的な使い方を示すものなのかどうなのかは別途調べる必要がある。
 - (14) 電話そのものについては「電話もだんだん普及してきた。昔は、電話をかけるのが恐いという人が多かったし、ベルが鳴ると逃げて歩く人もあった」との野元菊雄（1922～2006）による証言が1956年11月18日号の『週刊サンケイ』にある。
 - (15) 山口瞳は1965年1月11日号の『週刊新潮』で「死んだ母と書くときに変な違和感がある。なんだか変なのだ。ドギツイというのとちょっとちがうが、しっくりこない。といって、私の亡くなった母と書くのも、なんだか^{はばか}憚りがあるように思われる。誰に対して、どう憚られるのかわからないが、申しわけないような気分になる。「死んだ母」と「亡くなった母」との中間にあたる言葉がないものか。「亡くなった母」と書くときは、世間様に申しわけないという気分になり「死んだ母」と書くときは^{なんじ}“汝、孝養を尽せよ”という声^{こゑ}がきこえてくるように思われる。「亡くなった母」と書くと、母が「お前さん、そりゃちがうよ」と言って出てきそうな気がする」と述べた（山口（2016））。「亡くなる」に違和感があるのはわかるが、さりとしてほかにいい表現が見つからないという現代人の心理をうまく捉えた文章だと思う。もっとも、幸田文の

- 随筆や芝木好子（1914～1991）の小説には身内に対する「亡くなる」が出てくることなどを考えると、この動詞については、男女差も含めて、改めて検討する必要がある。
- (16) 評論家の俵萌子（1930～2008）は大石ほか（1970）で自身は「行ってまいります」で育ったが、子どもは俵に「ママ、バイバイ」と言うと言っている。
- (17) 1951年の『近代文学』6-4に載る小説家・中野重治（1902～1979）の指摘も参照。
- (18) 子どものことばについては、いろいろと調べる必要がある。たとえば水面に小石を投げる意の「水切り」という語は小石の転がる川の近くに育った特に男の子にはなじみがあっても、都会に育った特に女の子にはなじみがないというように使用主体に差が出そうであるが、実際のところはどうかというようなことである。敬語については、「あそばず」は「戦前上流階級のことばとして、一般社会の女性にもまねられたものですが、戦後は敬語簡易化の傾向を反映して余り用いられなくなったようです」（辻村（1963））という事例がある。
- (19) 見坊豪紀（1914～1992）は1964年5月18日の『週刊読書人』に「国語研究所の西尾寅弥さんが「卒園式」ということばがある」とびっくりして教えてくれた。私も少し前に気がついて採集していたが、出典はたがいに別であった」と記している。
- (20) 神社仏閣の側としては、①「拝観」に対し謙譲語の意識がない（改まったことば、くらいに捉えている）、②神仏の前では皆が謙譲の心を持つべきであり、「拝観」は神社仏閣の人間ではなく、神仏に対する敬意を表するものであるから拝観する本人ではなくても使うことができると捉える、といったいずれかの理由またはその両方の理由により「拝観」を用いるのであろう。
- (21) 「話を振る」の「振る」や「突っ込む」「引ける」が「上方系の芸人のいわば隠語」（水谷（2011））であったという場合は、地域方言兼社会方言の性質を持つ。
- (22) 社会方言の内部における変化の例が戸板（1958）に挙がる。小説家の内田百閒（1889～1971）の書いたものに校正刷りの文字を取り除く指示として現在は「トル」が使われるが、大正時代には「トレ」が使われたとの記述があるという。その理由について戸板は「トレという命令形では威張っているようで感じがよくないから、民主的にしたらしい。印刷会社は意識的な労働者を早くからもっていたから、この要望が出たのだと考えると、話の筋が通る」と述べる。内田による指摘を記録した文献と上記の内容を裏づける資料の確認を要する。
- (23) 念のために記すと、米川明彦氏は1955年、宇佐美まゆみ氏は1957年の生まれである。
- (24) 「朝日」は朝日新聞の「聞蔵Ⅱ」（1985年からの新聞記事、AERA、週刊朝日の記事）により、「読売」は「ヨミダス歴史館」（1986年からの新聞記事）による。数字は、各活用形の用例数を合計したものである。表2と表3の記事の検索は2020年8月18日に行い、範囲は18日までの全期間。論文の本文で記事の用例数に言及する際も同様である。
- (25) 東京の秋葉原で1995年から味処はつくらを営む石川晴美氏によると、客が口にするのは「満足」や「もう食べ（ら）れない」であり、「満腹」をふだん耳にすること

はないという。「閉口」も書きことばには時折見られるが、話しことばに生きているのかどうかは疑わしい。東京の築地に生まれ育った田中洋子氏（1955～）によれば、子どもの頃、近所の「おじちゃん」が「それは閉口だね」と使っていたのを記憶するとのことである。幸田文の『父その死』（最初の刊行は1950年）には幸田露伴が「閉口」を使う場面が出てくる。「私は腹を立ててははに訴えていると、うしろに父が聴いていて、「そんなことぐらいでお前は閉口しては、いまもし応酬しなくてはならない場合があったら一体どうするつもりでいるんだ」という用例である（幸田（2004））。話しことばにおける衰退が進んでいるであろう類例として記す。

(26) 「髪のを減らす」意の「すく」を枝葉の場合に類推適用して「すく」と回答する人も少なくない。園芸の世界では「すく」を使うことは一般的ではない。

(27) 東京の神田佐久間町で米問屋を営む家に生まれたフランス文学者の鈴木信太郎（1895～1970）の生活には「江戸末期の爛熟した文化の残り滓（かす）が、生活にこびり附いていた」という（鈴木（1991））。それは家の敷地に7、8坪の庭があり「相当に大きな松の木と、古い榎（かや）と、木斛（もっこく）とを心（しん）として、灯笼や、沓脱（くつぬぎ）や、鉢前（はちまえ）や、井筒や、飛石など、みな大きなものをあしらって、下草が植えられ、苔が丁寧に育てられていた。季節季節には植木屋が入って、雪釣りを作ったり、松葉を敷いたり、古い葉を手でむいたり、鋏を入れたり、一々法にかなったような事をする。だから植木屋など言ったら怒られてしまう。庭師である」というような下町の生活である。「すかす」を身につける可能性が高い生活という言い方もできる。実際に「すかす」を記録に残したものとしては、随筆家の青木玉（1929～）の『底のない袋』という作品に「家に来てくれる植木屋さんは、お互に親の代からの付き合いである。（中略）表の塀ぎわに大名竹^{だいみょうちく}の植込みがあり混んだ葉を透した枝が外に散っていた」という用例がある。親から、または植木屋さんから手渡されたことばを大切に使う様子が感じられる。

謝辞

本稿は、第378回日本近代語研究会・第217回青葉ことばの会（2020年12月19日オンライン開催）での口頭発表をもとに加筆・修正した。松本修氏の文献は橋本行洋氏から、木田章義氏の文献は新野直哉氏から、石井好子氏の文献は稲益佐知子氏から、それぞれご教示いただいた。お三方を含め、貴重なご意見をくださった皆様に感謝申し上げます。

（なかがわ・しゅうた／本学兼任講師）